

「魏志倭人伝」を考える
—髪型と衣服形態について—

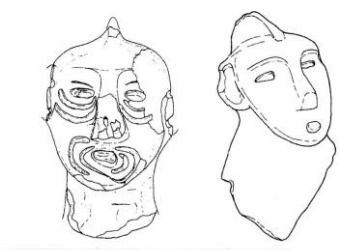
1 髪型について

「魏志倭人伝」には倭人の髪型と衣服形態について記しているの、本項ではこれについて考えることとする。

「魏志倭人伝」の記述は、「男子は皆露^ろ髪^{かい}し、木^も髻^{くめん}を以て頭^かに招^かけ、その衣は横幅、ただ結束して相^{つら}連^らね、ほぼ縫^{ぬい}うことなし。婦人は被^ひ髪^{はつ}屈^{くつ}髪^{かい}し、衣を作ること^{たん}被^びの如^{ごと}く、その中央^{ちゆう}を穿^うち、頭^{づらぬ}を貫^くきて之^きを衣^きる。」である。この文は倭人の髪型、衣服について述べたものであるが、男子は皆、冠や頭巾などをつけず、木髻ではちまきをし、その衣は横に幅広い布を合わせるだけでほとんど縫うことはなく、婦人は、髪を結ばないでそのまま流しにしたり、髪を後ろに束ねたりしており、衣服を作るには単衣の夜着のようなもので、その中央に穴をあけて頭を通して着るといった意味である。

男子は皆かぶり物をつけず、木髻ではちまきをしていたという、この男子の髪型はどんなものであったろうか。古墳時代の埴輪には、側頭部に頭髪を束ねて紐で結ぶ美豆良（ミヅラ。角髪、髻などとも書かれる。）を結ったものがみられ（図2）、一般に古墳時代の男子は美豆良を結っていたと考えられている。遺跡から出土した弥生時代中期の土偶の中には頭頂部に膨らみがあるものがあり（図1）、髻を結っているようにも見えるが、「魏志倭人伝」が記す弥生時代後期にはいかなる髪型であったかについては確認できる史料がなく判然としなかった。

図1 頭にふくらみがある土偶
(弥生時代中期)



注 「魏志倭人伝の考古学」
(佐原真 岩波現代文庫
2003年)による。

土偶の左は鴨部川田遺跡（香川県）、右は西川津遺跡（島根県）

図2 美豆良を結った正装の男（古墳時代）

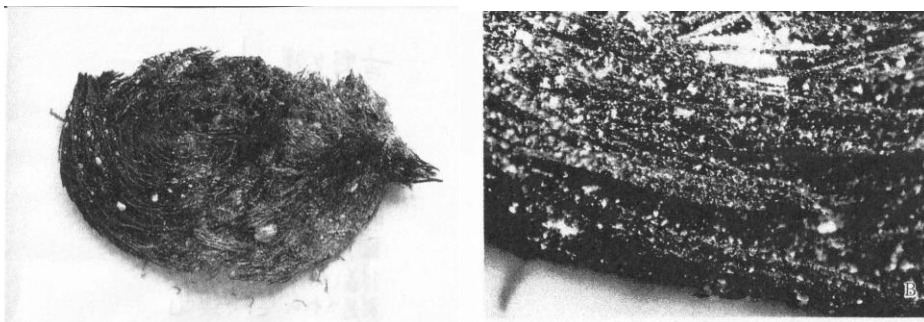


注 「埴輪—古代の証言者」(若狭徹
角川ソフィア文庫2022年)による。
埴輪は姫塚古墳(6世紀後半 千葉県)
出土。本図はL字型の下げ美豆良である。

出土

ところが、吉野ケ里遺跡から出土した遺物により、当時、古墳時代の埴輪のように美豆良を結っていたことが確認された。吉野ケ里遺跡の昭和 61 年度に実施された発掘調査で、志波屋四の壺地区の SJ0367 甕棺墓（弥生時代後期初頭。桜馬場式期）と 62 年度の吉野ケ里丘陵地区の SJ0157 甕棺墓（桜馬場式期）から、弥生人の頭骨の側頭部に付着した状態で毛髪様の束が検出された。このうち SJ0157 甕棺墓のものは、写真撮影後に大雨のため遺構全体が崩壊したため失われたが、SJ0367 甕棺墓のものは、発掘に当たった佐賀県教育委員会が長崎大学医学部の解剖第二教室に分析を依頼した。さらに同教室は科学警察研究所の法科学第一部の法医第一研究室に分析を依頼した。その分析により、毛髪様のものからは毛髄質が確認され、7 層の層状構造の各層が毛小皮を形成する小皮に一致し、内部に小皮細胞特有の層構造がみられ、さらに髄示数（0.20～0.30 前後）、空胞の配列（一列に長軸方向）などからおそらくヒトの頭毛と考えられるとされた。また、この頭毛の束に付着していた紐状のものは、「木を粉砕して作ったパルプの繊維の形態によく似ていること、元素分析の結果からも木繊維を粉砕して紐にしていたものと考えられる。」という結果となり、この紐状のものは木綿と考えられる。これらことから、毛髪様の束は人の頭毛であり、木綿で側頭部に束ねられていたもの、すなわち美豆良であることが確認されたのである。美豆良は少なくとも弥生時代の後期にはすでに倭人の間で結われており、古墳時代に引き継がれていたのである。

図3 吉野ケ里遺跡から出土した美豆良とみられる頭髪とその拡大図（右）



注 「吉野ケ里 本文編」佐賀県教育委員会編集による。

婦人は「髪を結ばないでそのまま流しにしたり、髪を後ろに束ねたりしており」となっており、長い髪をそのまま伸ばして、今でいうロングヘアにしたり、それをポニーテールのように後ろで束ねて紐などで結んだり、髷のように結っていたのであろう。

「木綿」であるが、古来日本では「木綿＝木綿」は「ユウ」と読まれ、^{こうぞ}楮などの甘皮を叩いて作った繊維を用いて織った布のことである。上記の頭毛の束を結んでいた紐も材質は判明していないが、楮などから作られたものと考えられる。布目順郎氏は、当時日本で

はモメンの栽培は行われていなかったもので、楮などの繊維で作った織布としての「ユウ」か、あるいは麻布か苧麻布（カラムシで織った布）のようなもので髪を結っていたものと考えられるとした。さらに、これを「魏志倭人伝」が「木縣」としたのは、当時中国では木本科のモメン樹、その果蠶（果実をおおう毛）、繊維で作った糸を用いて織った布を「木縣」と称しており、その「木縣」を頭につける習俗が行われていて、そのことから憶測したか、あるいは倭人の習俗が海南島とおなじであるという先入観があったことによるものであろうと述べている。

2 衣服形態について

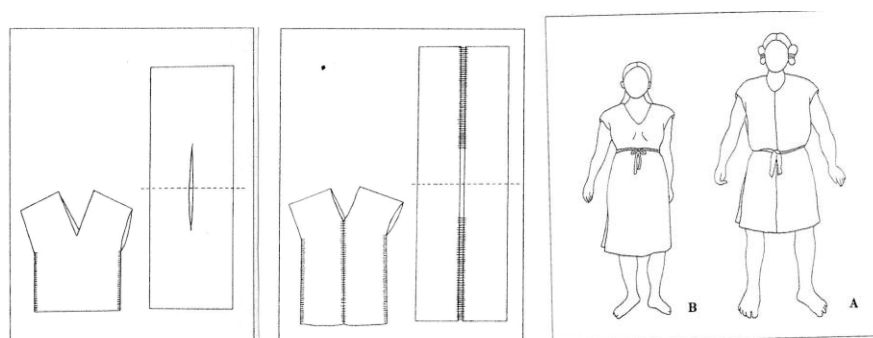
(1) 横幅衣と貫頭衣

「魏志倭人伝」の「男子は……、その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うことなし。婦人は……、衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。」とする衣服形態がどのようなものであったかについては様々な説があるが、ここでは布目順郎氏の説明するところの概略述べ、併せてその他の論にも触れ考えていくこととする。

男子の「その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うことなし」については、布目順郎氏は、猪熊兼繁氏の「二幅の布を綴くり合わせて（縫うとはいえない。編むとか、かがるかという方法か）、首と両腕とを出したに過ぎない、学説は多いが自分はこのようなものであったと思う。」（以下「横幅衣」という。）とする考えに、女子の「衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。」については、「一幅の布の真ん中に縦の裁ち目を作って、これから頭を貫き、両ワキを綴くり合わせ、その合わせ目の上をあけて、両腕を出した。中央に円形の穴をあけた様式ではなかったと思う。」とする考え（以下「貫頭衣」という。）に賛成している。

さらに布目順郎氏は、登呂遺跡や唐古遺跡から出土した緯打具から推定される布幅は30センチメートル内外であり、それは織婦（織り手）の腰幅と一致するので、この幅が自然な織布の幅であったろうとしながらも、弥生時代の織布の幅は、各地の遺跡から出土した経巻具、緯巻具の巻幅から50～60センチメートル幅の布も織れるような織機があったとすればまた違った考え方がなされなくてはならないとして少なくとも幅50センチメートルぐらいのものは常時、織っていたものと想像している。さらに当時の弥生中期以降の男性の肩幅は40～42センチメートル、女性で35～37センチメートルと推定し、男性用には1枚では狭すぎるので、二枚横に並べてその合わせ目を綴くる方法によらざるを得ず、このため横幅衣となり、女性や子供の場合は、一枚で足りるので、中央に穴を穿ち貫頭衣とすることで間に合うものとなるというものである。これによれば、男女の衣服の相違は使用する布を1枚にするか、2枚にするかの相違となり、形態的には同じものとなる。

図4 猪熊兼繁による横幅衣（中）、貫頭衣（左）と
布目順郎による復元想像図（右。右が男性、左が女性）



注 「倭人の絹」 布目順郎による。

この考えによらない説を一つ紹介する。日本史学、服装史の研究者である武田佐知子氏は、基本的には、猪熊氏の主張に賛同しながら、弥生時代の織機では布幅は織り手（主に女性）の身体の幅に規制されざるを得ず、普通には 25 センチメートル前後のものが多かったとし、50センチメートル以上の布幅になると織り手が一人で^{よこいと}緯を通すことは困難で二人並んで作業しなければならない非効率な織布法であり、一般民衆が衣服の素材として使用したとは考えにくく、女性や子供の場合もまた2枚の布が必要となるとしている。そうであれば「魏志倭人伝」の男女別に書き分けられた横幅衣、貫頭衣をいかに考えるかということとなる。これについて、武田氏は、「新唐書」（列伝第 147 南蛮下）の南平獠^{りょう}（隋末唐初の福建省の獠族）の条にその衣服について、「横幅二幅、穿中貫其首、別曰通裙」という記載がある例を上げ、これは横幅に布を二幅並べて作り、中を穿ち、首を通して着用するものであり、これはとりもなおさず貫頭衣と言われるもので、横幅の衣は同時に貫頭衣でもあったということであるとする。さらに、武田氏は、これは「魏志倭人伝」の衣服についても適用されるのではないかと考えると、横幅衣とは、衣服の作製法上、すなわち服を作成する際の布の取り方からする名称であり、貫頭衣とは、着装法上、すなわち服の着方からする名称なのであって、その実は、同じ形の衣服について言っているのであると考えると述べている。

結局のところ、武田氏の説は女性の場合にも2枚の布が必要で、横幅衣と貫頭衣の書き分けは、衣服の作製法上の名称と、服の着方からする名称の違いということであるとする。

ここで改めて、「魏志倭人伝」の女子の「衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。」はどのようなことを言っているのかを考えてみる。この文には、男子のように布を「横幅にして使用し、これを結束する」というような使用する布については触れられていない。作り方について「単被」のように作ると記しているだけである。「単被」の「単」は^{ひとえ}「単衣」のこと、「被」は夜着のことであるから、「単被」は単衣の夜着のことである。肌にぴったりした衣ではなく、夜着のようにゆったりした作りの

衣ということである。そうであれば、使用する布は布幅 30 センチメートル内外の 1 枚の布ではないであろう。「穿ち」は、漢和辞典(新選 漢和辞典 改訂新版 小学館 1967 年)によれば、①穴をあける、②穴、③穴があく、④やぶれる、⑤つらぬく、つき通す、などの意味がある。布に「縦の裁ち目を作って、」穴をあけるという意味だけでなく、2 枚の布をかがる際に中央部をかがらずに穴をあけるという意味もある。これらのことから考えると、女子の衣は単衣の夜着のように(2 枚の布を使った)ゆったりした作りの衣で、(男子の衣服を作る時のように二幅の布を綴り合わせて)その中央をかがらずに穴をあけ、これに頭を貫きて衣とも読めるのである。

さらに、武田氏は、「三国志」(53 卷 呉書 薛紘伝)に「貫頭使った^{きじん}左衽」との記述があり、これは貫頭衣で左衽、すなわち左前に着ることを意味するとし、二幅の布を背中部分だけ綴り、前は左衽に着ていたと提唱している(図 5)。なお、布目順郎氏は、左衽など前で合わせる合わせ方について、男性の袴といっしょにもたらされた騎馬民族の風習ではなかったかとも考えられると述べ、後世の着装法であるとしている。

図 5 武田佐知子氏による貫頭衣の復元(男女共通 左前)



注 「弥生の布を織る一機織りの考古学」竹内晶子による。

(2) 弥生時代の織機

a 織機の構造

横幅衣と貫頭衣について織機の面から考えてみる。

古代の織機には、^{げんしはた}原始機と^{じはた}地機がある。原始機は弥生時代に、地機は古墳時代の 5 世紀ごろにそれぞれ大陸から伝わったといわれている。原始機は簡単な構造で、^{たてまきぐ}経巻具を樹木や棒に固定して、^{ぬのまきぐ}布巻具との間に^{たていと}経を張り、布巻具を織り手の腹部に腰当具で固定し、中筒(板状、筒状、棒状などがある。)と^{そうこう}綜絊で上糸と下糸を入れ替え、開口部に^{よこしぐ}緯越具で^{よこいと}緯を通し、^{よこうちぐ}緯打具で緯を打ち込んで布を織る。地機は、簡単に言えば、原始機を^{はた}機台の上に乗せたものである。

古代の織機は、織機一式が揃って出土した例がないので、明確には分かっていないが、出土した織機の構成部品や現代の東南アジアなどで使われている織機の構造などから推定されている(図 6-1、6-2)。

図6-1 古代の織機（復元推定図）

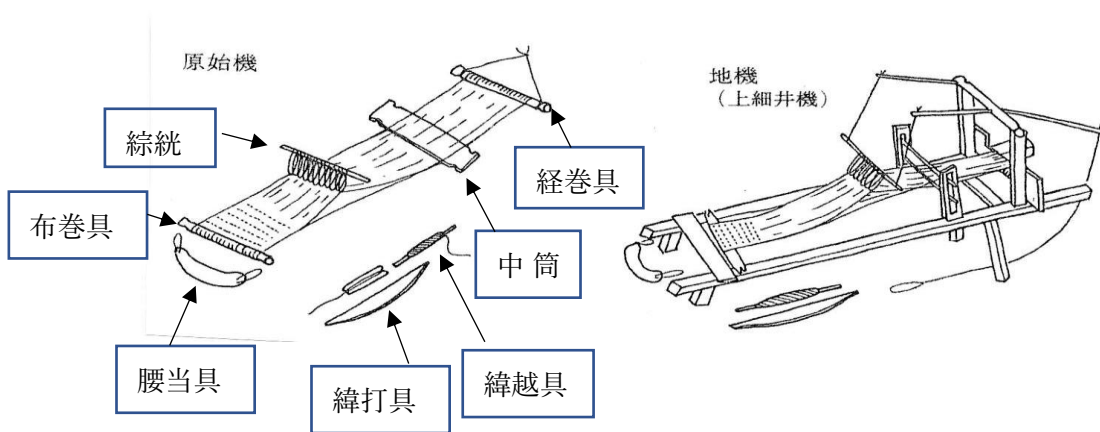
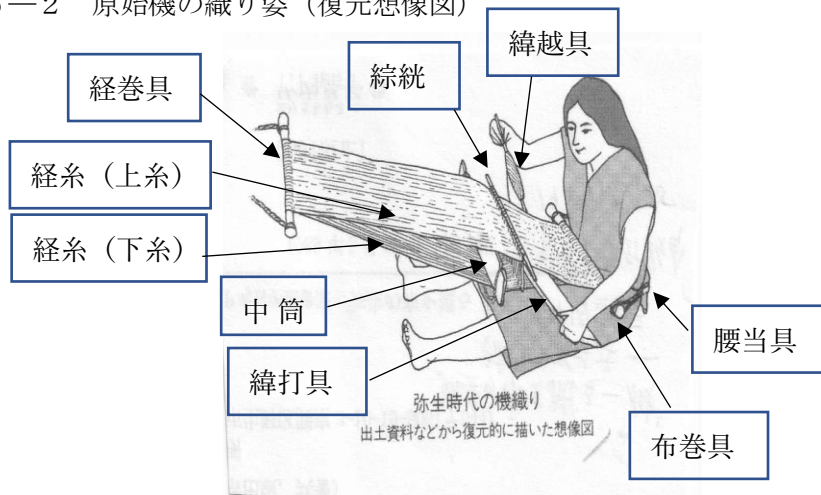


図6-2 原始機の織り姿（復元想像図）



注 「弥生の布を織る一機織りの考古学」竹内晶子による。

□ は筆者が加筆した。

b 織り方

織り手は、次の②と③の動作を交互に繰り返して緯を打ち込んで布を織っていく（図6-2参照）。

- ① まず、経巻具を杭や立木の幹などに結びつけて固定する。布巻具を織り手の腹部に当て、腰当具で固定する。経巻具と布巻具との間に経をかけ、1本おきに綜統の糸の輪ですくう。これが下糸で、すくわなかった糸が上糸である。
- ② 板状の中筒を上糸と下糸の間に垂直に立て、綜統を下ろしたまま体を起こして経をピンと張り、開口部に緯越具を右から左へ入れて1本目の緯を通し、さらに開

口部に緯打具を入れて緯を手前に打ち込み、緯打具を左へ抜き取る。

- ③ 次に中筒を倒し、体を前に倒して経を緩め、右手で綜統を持ち上げて下糸を上糸の上に上げ、開いた開口部に緯越具を左から右へ入れて2本目の緯を通し、綜統を持ち上げたまま、体を起こして経をピンと張り、緯打具を入れて緯を手前に打ち込み、緯打具を右に抜き取る。
- ④ 布が織り進むに連れて、織り上がった布は順次布巻具に巻き取っていく。

c 布の織幅

京都大学総合博物館研究員の東村純子氏は、遺跡から出土した布巻具（同氏は布送具と呼称している。）について、その身部は、40～60センチメートルあるが、身部の両端が3.5センチメートル～8センチメートル幅で一段高くなっていたり、装飾的な文様が施されていたりしており、この部分には糸をかけられないので、この部分を除いた内部分に経がかけられたと推定している。そのうえで、段や装飾文様のない内部分に経をかけたならば、織り上がった布幅は弥生時代においては、30～40センチメートル前後となり、古墳時代の中期以降には40～50センチメートル台のやや広幅のものが現れると論じている（「考古学からみた古代日本の紡織」2011年）。古墳時代の中期以降には地機が出現することから織り手の負担が軽くなる（綜統の上げ下ろしを足で操作できるなど）ことによると考えられる。

また、同じく東大阪市立郷土博物館学芸員の竹内晶子氏は、出土資料などから布巻具の長さは腰幅と同じか少し長いくらいと考えられ、この幅が操作する上で最も扱いやすい長さで、この幅の布巻具・経巻具では、30センチメートル内外の幅の布が織れると述べている（「弥生の布を織る一機織りの考古学」1989年）。

主な織り手である女性の肩幅が35～37センチメートルと仮定すると、腰当具で布巻具を装着する腹部（腰部）の幅は、それより少し狭いであろう。原始機の織り方は織り手に大きな負担がかかるものであり、織り手の肩幅（腰幅）程度が最も楽に作業が行えるのであって、これを大きく超える幅50センチメートルの布を一般的に織っていたことは合理的ではないと考える。両氏が述べるように、日常的には30センチメートルから40センチメートル前後の布が織られていたと考えるのが合理的であり、これはとりもなおさず武田佐知子氏の説を肯定するもので、女性や子供の場合も小児などを除けば2枚の布が必要であったと考える。

（2）支配者層の服装

横幅衣であれ貫頭衣であれ、「魏志倭人伝」にいう弥生時代の服装の想像図は、袖なしで裾は膝丈程度である。これは稲作などの労働には適したもので庶民の服装であると考えられる。素材は当然大麻等の植物繊維製で織の質も粗末なものであったであろう。

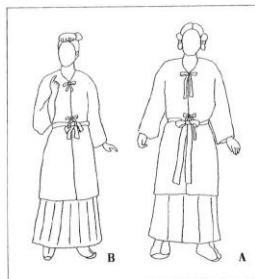
なお、余談であるが、この服装は夏期にはよいが、冬期には寒いのではないか。古代

の人々は寒さには強かったという説もあるが、袖なし、膝丈の衣服では現実問題としては厳しいと考える。「魏志倭人伝」の末蘆国の条に「草木茂盛し、行くに前人を見ず」との記述があり、前を行く人が見えないくらい草木が茂盛しているということであるから「魏志倭人伝」が描く倭人の世界は夏であり、服装も夏用の服であると考えられる。日本の中では暖かいと言われる九州地方においても冬期は雪が積もることもあり、強い北風が吹くのであり、この季節を袖なし膝丈の服装で過ごすのは酷である。弥生人といえども長袖、長裾の服の重ね着や皮製の服も着て過ごしたと考えることが实际的である。

支配者層は、おそらく自らが農作業などの労働に従事してはいなかったであろうから、庶民とは異なった衣服を着ていたことは十分に考えられるが、支配者層に関する服装は、「魏志倭人伝」には記載がない。この時代の北部九州の遺跡からは大麻製の織質の良い布や人骨に付着した多数の絹片が発掘されているが、絹片の中には前腕、脛骨に付着したもの、下肢を含むほぼ全身に付着したものなどが検出されている。このことから遺体を埋葬する際に全身を覆う衣服を着せたであろうことが分かる。また、人骨は付着した布の材質が絹であることから支配者層の弥生人と考えられ、支配層の人々は葬送の時のみならず日常的に全身を覆う衣服を着ていたであろうことは容易に推測できる。布目順郎氏は、古墳時代の人物埴輪、高松塚古墳壁画、天寿国繡帳等に見える人物像、文献では「古事記」、「日本書紀」の記述のほか古代中国の壺や画像石の人物像、中国古文献などを参考に、諸々の事情をも考察して、支配者層の人々の服装を想像した(図7)。男女とも長袖・長裾の服に帯を締め、裳を着けたものである。胸前の合わせ目は男女ともに衣料の節約上、庶民と同様に真ん中合わせである。髪型は、男性は美豆良、女性は髷で、履物は共に皮沓である。この服装は、平常服で素材は当時の出土品からみて大麻であるとし、礼装の場合は、襟、袖口、裾などに模様をつけ、模様のある帯を締め、冠、首飾りなどを着装し、大麻衣の上に錦や紗縠しよこくなどの絹製上着を重ねたと想像している。

なお、吉野ヶ里遺跡から出土した絹織物には日本茜染め、貝紫染めの錦様の染色があるものがあり、支配者層は美しく染色した絹織物を着ていたことが分かっている。

図7 弥生時代上層人の衣服形態想像図



注 「倭人の絹」布目順郎による。右:男性 左:女性

(3) 袖の縫製

「魏志倭人伝」には、「その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うことなし。」と記しており、倭人は布を縫うことはほぼしないとしている。二枚の布を合わせるには縫うのではなく、布をかがり合わせたものであるということであろう。しかし、上記のとおり庶民の夏服は袖なし膝丈であるが、冬期には袖や裾のある衣服を着用したのではないかと考えられ、また、布目氏の上層人の想像上の衣服には袖がつけられている。弥生時代に袖のある衣服が作られていたであろうか。実はそのことを推測させる遺物が出土している。弥生時代早期の菜畑遺跡からは縫い合わせの糸、中期の池上曾根遺跡からは縫い目がある布が確認されており、弥生後期の青谷上寺地遺跡から絹と考えられる布を突き合わせて縫い合わせたものが出土している。吉野ケ里遺跡 SJ1768 甕棺墓から出土した絹織物の中に縫合部分の破片 2 点が出土しており、まつり縫いしたのちに方向を違えた布を縫い合わせており、これは後の時代の見頃に筒袖を縫い合わせたものと同様なものである。これらのことから弥生時代には布をかがり合わせるだけでなく、縫い合わせる技術があり、袖付きの服装が日常的に着られていたことが考えられるのである。

参考文献

- 石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝（1）」岩波文庫 （株）岩波書店 1951年
- 全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」講談社学術文庫（株） 2011年
- 佐伯有清 「魏志倭人伝を読む」上・下 吉川弘文堂 2000年
- 布目順郎 「倭人の絹—弥生時代の織物文化」 小学館 1995年
- 布目順郎 「養蚕の起源と古代絹」 雄山閣 1979年
- 布目順郎 「絹と布の考古学」 雄山閣 1988年
- 布目順郎 「絹の東伝」 小学館 1988年
- 佐原 真 「魏志倭人伝の考古学」 岩波書店 2003年
- 武田佐知子 「古代日本の衣服と交通—装う王権つなぐ道—」 思文閣出版 2014年
- 竹内晶子 「弥生の布を織る—機織りの考古学—」 東京大学出版会 1989年
- 七田忠昭 「吉野ケ里遺跡—復元された弥生大集落—」 同成社 2005年
- 七田忠昭 「日本の遺跡2 吉野ケ里遺跡」 同成社 2005年
- 東村純子 「考古学から見た古代日本の紡織」 六一書房 2011
- 東村純子 「輪状式原始機の研究」 2007年 日本史研究会及び日本考古学協会発表論文
- 佐賀県教育委員会 「吉野ケ里 本文編」 佐賀県教育委員会 1994年
- 若狭 徹 「埴輪 古代の証言者たち」 角川ソフィア文庫 2022年
- 小林達雄 亀井正道 編 「日本陶磁全集3 土偶 埴輪」 中央公論社 1977年

塩田 泰弘（しおた やすひろ）

1945年熊本県生まれ。

2012年退職時に友人に勧められて大学の古代史に関する公開講座を受講したことから、従来からの古代史好きが高じてのめり込む。現在、大学の公開講座、カルチャーセンターの講座、講演会等に通い、諸先生の著書、遺跡の発掘報告書などを購読するなど、勉学に勤しんでいる。

論文「魏志倭人伝からみた邪馬台国概説」（「季刊 邪馬台国」126号 梓書院）

論文「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」（「季刊 邪馬台国」131号 梓書院）がある。

